

# 滋賀医科大学キャンパスマスタープラン2022



## 目次

1. はじめに	1
2. キャンパスの長期的見通し	2
3. 現状と課題	
1 基本的指標	4
2 老朽化	5
3 エネルギー	7
4 面積	7
4. キャンパス中期計画2022～2027	8
5. 部門別計画	
1 ゾーニング計画	10
2 デザインガイドライン	12
3 スペース有効活用の計画	13
4 今後の整備予定建物等の計画	14
5 交通計画	17
6 動線計画	18
7 パブリックスペース計画	19
8 インフラストラクチャー計画	21
9 ユニバーサルデザイン計画	22
10 省エネ計画	23
11 施設維持管理計画	24
12 セキュリティ計画	25
13 防災計画	26
14 イノベーションコモンズ化計画	27

### 【キャンパスマスタープラン2021からの主な変更点】

P1 「はじめに」の内容一部更新	
P2 第4期中期目標の内容に更新	
P3 補助整備率の数値更新	
P4 基礎的指標のデータ更新	
P5,6 老朽化状況の配置図更新	
P7 エネルギー消費量のグラフ更新。見える化追加	
P8,9 第4期中期計画の内容に更新	
P11 ゾーニング計画の配置図更新	
P13 講義室の稼働率を更新	
P14 整備予定建物、配置図更新	
P17 駐車台数を更新	
P19 配置図に防災関係の文言を追記	
P20 中庭の整備(開学50周年事業関連)について追記	
P21 インフラ設備長期修繕計画(電気設備及び 機械設備)を策定したことにより内容を更新	
P22 ユニバーサルデザイン整備計画図更新	
P23 エネルギー消費量のグラフ及び方針更新	
P24 別冊のインフラ長寿命化計画の更新に伴い変更	
P27 イノベーションコモンズ化計画追加	

## 1 はじめに

大学キャンパスは、創造性豊かな人材養成や独創的・先端的な学術研究、高度先進医療等を実現するための基盤であり、また、生涯学習や産学連携など地域貢献の実践の場である。国立大学法人等は、国民から負託された資産であるこれらのキャンパスを最大限に活用するとともに、全学的なマネジメントによる戦略的な整備・共用を進め、サステナブルなキャンパスの実現を目指すとともに、地域・社会・世界に一層貢献していくことが求められている。教育・研究活動に支障をきたさないよう既存施設の適切なマネジメントを確実に実施するとともに、大学の教育・研究活動に応じた施設機能の高度化・多様化を図ることは、大学経営における重要な課題であり、これを効率的に推進するためにはキャンパスマスタープランは不可欠である。

本マスタープランは、施設マネジメントの考え方を参考にしながら、キャンパスの長期見通しと現状分析から目標を導き出し、目標を実現するための各計画を記載した。この計画をもとにPDCAサイクルを回していくことで改善を加え、よりよいキャンパス創造につなげようとするものである。

### キャンパスの長期的見通し

今後の施設整備の方針目標を定めるにあたって、基礎となるのが本学の理念や中期計画(大学の基本的な目標)である。それらを以下に示す。

#### ■滋賀医科大学理念

滋賀医科大学は、地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学として、医学・看護学の発展と人類の健康増進に寄与することを理念とする。

#### ■中期目標(大学の基本的な目標)

滋賀医科大学は、第4期中期目標期間に開学50年を迎える。引き続き教職員及び学生が相互に尊重し明るく前向きに活動できる魅力ある(＝アトラクティブな)大学として持続し続けるため、“**サステナブルでアトラクティブな大学**”をキーワードに掲げ、本学の理念である“地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学として、医学・看護学の発展と人類の健康増進に寄与する”ため、以下の目標を推進する。

1. **滋賀県における医師不足が慢性化する中、地域医療のサステナビリティ**のために最も重要なことは、滋賀県に定着する優秀な医師の育成である。このため、学部教育における地域枠・地元枠の有効活用と地域基盤型教育を充実させて、将来の医師像を明確にした卒前・卒後キャリアパスに基づいた医師の人材育成を行う。また、高齢化の進行に伴い地域包括医療の比重が重くなる中、重要な役割を果たすのは訪問看護を含む新たな慢性期看護医療をリードできる優秀な看護師と、今後、医師の働き方改革を進める上で、高度急性期医療における安全な医療遂行のためには、特定行為看護師の役割が益々重要となる。さらにCOVID-19感染を契機に感染症専門看護師の必要性も大きくなった。このため、未来のリーダーとなる看護師を関連施設や自治体と協働して育成する。

2. **教育のサステナビリティ強化**は、Society 5.0を目指す社会変革の中で、医学領域においてもAI開発、ビッグデータ解析等のICTを駆使できる人材養成が求められるため、学部と大学院にSTEAM教育を取り入れ、新型コロナウイルス感染環境で立ち上げたオンライン教育、シミュレーション教育を発展させ、未来に向けた教育システムを構築する。

3. **研究のサステナビリティ強化**は、神経難病研究センター、動物生命科学センター、先端がん研究センター、NCD疫学研究センターにおける国際的発信力を持つ特色ある研究の深化に加え、幅広い領域での研究活動を活性化させる必要があり、その中で将来のリーダーとなる若手人材育成を推進するとともに、産学連携研究の推進により外部資金の獲得を増加させ、教育研究環境の改善を図る。

4. **業務運営のサステナビリティ強化**は、ソフト面では透明性のある内部統制機能強化、デジタル技術の活用を含む業務効率化、多様なステークホルダーとのコミュニケーション推進、男女共同参画推進計画の地域への展開、ハラスメント防止の推進、ハード面では附属病院の機能強化棟整備、施設と設備のマスタープランの確立と実行等に取り組む。

## 2 キャンパスの長期的見通し

### ■施設整備方針

本学の理念・基本的な目標を実現するため、以下の基本方針に基づき長期的(20年程度)なキャンパス整備を進める。

#### 基本方針

##### ①安全性信頼性環境性の高いキャンパス

教育・研究・診療活動を行うにあたって、施設の安全性信頼性は当然の前提であり、第一に確保されねばならない。また、今後の地球環境を鑑みると、これらの活動を持続可能な状態で行えるよう配慮していく必要がある。

##### ②教職員学生の創造性を誘発するキャンパス

特色ある教育・研究を推進し、世界に情報を発信する研究者を育成するためには、創造的環境を創出していくことが何より重要である。

##### ③在学者にとって快適なキャンパス

良質な医療の一環として、快適なキャンパスを提供する。

#### <キャンパス整備の考え方>

国の財政難、少子高齢化という本学をとりまく状況を考えると、今後、教職員学生数の大きな増加は考えにくい。従って現有資源をいかに有効に利活用していくかが今後のキャンパスの整備のポイントとなる。具体的には大学の経営戦略としての重要投資と、中長期的な負担の軽減を併せて検討し、経営的視点から資産形成と財務的負担を考えて進めていく必要がある。また、現在保有している施設ストックの環境を点検評価し、その質の向上について計画すること、施設ストックの適正規模を検討し、既存施設の有効活用を行う。新增築を計画する場合には施設整備後に必要となる経済的負担(維持管理費)を考慮することを重視する。

### ■面積方針

現在の補助整備率は94.0%である。今後は原則として計画現有建物の有効利用を図っていく。

### ■品質方針

本学施設はそのほとんどが開学時の1970年代後半に建設されており、現在改修時期を迎えている。また、建物寿命を迎える2030年頃にはこれらの建物を改築していく。また、修繕計画(インフラ長寿命化計画)を立案し、計画的な修繕を実施していく。

### ■財政方針

財政状況が急激に好転する見込みはないことから、施設維持管理にかかる費用を削減していく。そのために、余分な施設は保有せず有効利用をはかること、計画的で効率的な施設更新を進めること、光熱費を削減すること、を推進する。

### 3. 現状と課題

#### 3-1. 基礎的指標

現状と課題を洗い出すにあたって、本学では以下のデータを基礎的指標と位置付け、収集管理を行っている。これらのデータに異常が認められた場合はその原因を追及し、必要であれば施設整備目標に織り込んでいる。現時点での本学基礎的指標のうち異常がみられるのは、老朽化、エネルギー、面積である。

項目	指標	2020実績	現状分析
面積	一人あたり面積	91.7m <sup>2</sup> /人 (参考: 浜医大 96.4m <sup>2</sup> 旭川医大77.6m <sup>2</sup> )	面積以上に構成員が増えており、一人あたり面積は減少傾向にある
品質	満足度調査	—	患者、学生よりさまざまな意見が寄せられている。今後、改修完了の2年後目途にユーザー満足度調査を実施
経費	修繕費	101,191千円	老朽に伴い修理費が増えている
エネルギー	面積あたりエネルギー消費量	3,203MJ/m <sup>2</sup> (参考: 浜医大2,003MJ/m <sup>2</sup> 旭川医大3,731MJ/m <sup>2</sup> )	他の単科医科大学と比較してやや多い
老朽化	老朽化率(経年25年以上) 残存不具合率(FCI) 施設点検結果 故障数	50.6% (参考: 浜医大11.7% 旭川医大17.0%) 0.12(主要建物平均※1) — 496件	開学から40年がたち、開学当初に建設された施設の老朽化がすすんでいる。他の単科医科大学と比較してもかなり老朽化がすすんでいる。

※1 延べ床面積1,000m<sup>2</sup>以上の建物の平均値

### 3. 現状と課題 3-2. 老朽化

#### ■問題点

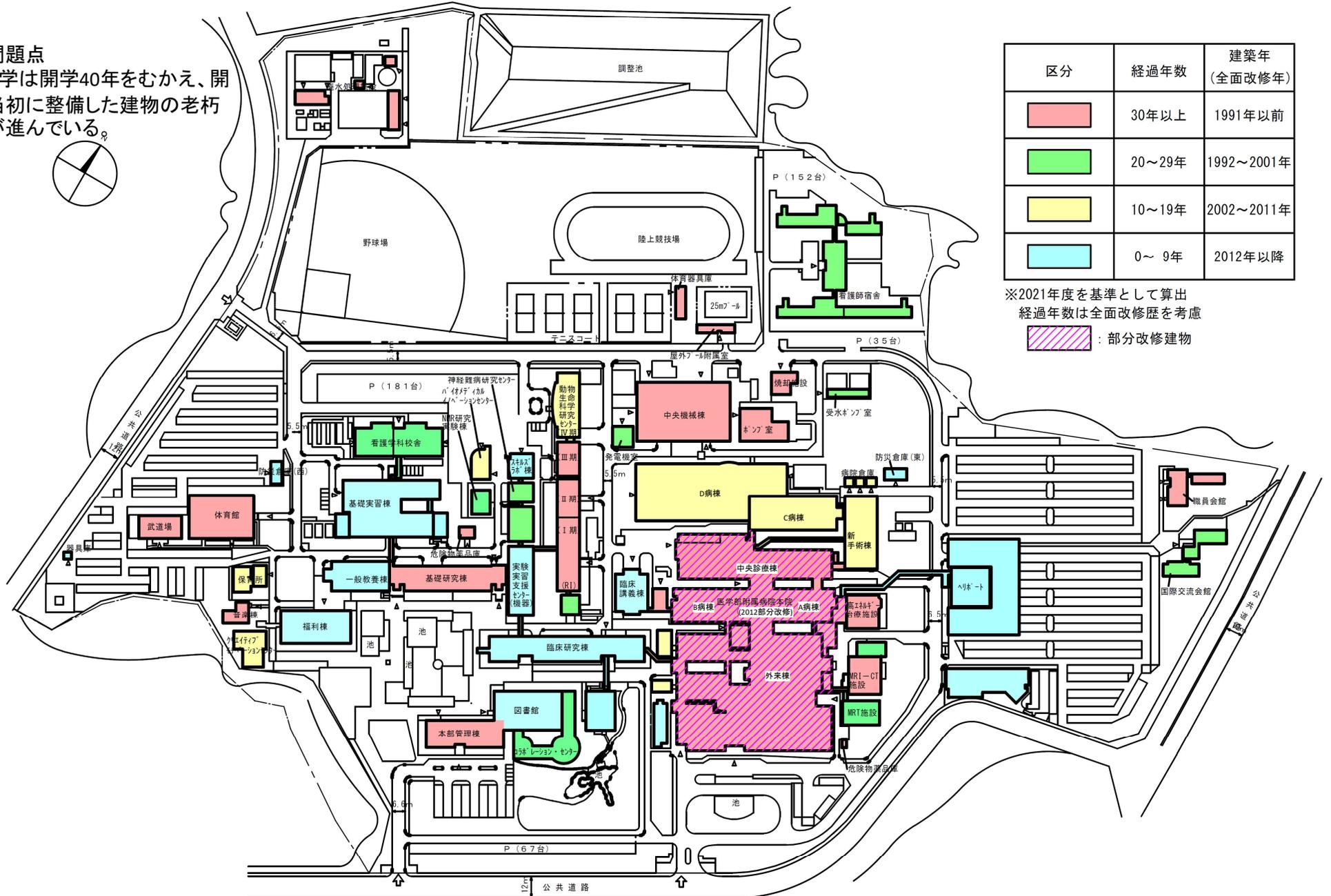
本学は開学40年をむかえ、開学当初に整備した建物の老朽化が進んでいる。



区分	経過年数	建築年 (全面改修年)
	30年以上	1991年以前
	20~29年	1992~2001年
	10~19年	2002~2011年
	0~9年	2012年以降

※2021年度を基準として算出  
経過年数は全面改修歴を考慮

: 部分改修建物



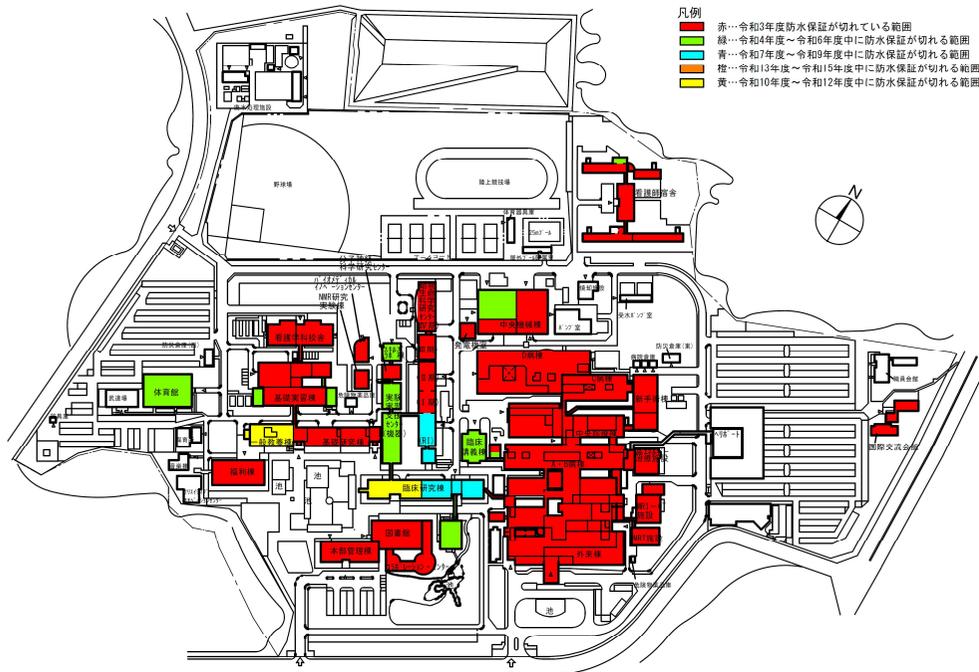
### 3. 現状と課題 3-2. 老朽化

#### ■今後の方向性

本学では、建物老朽化の指標として残存不具合率(FCI)を整理している。さらに教育・研究活動に適応した適切な施設を確保するため、施設の予防保全だけでなく、計画的な修繕・改修の実施に生かすことを目的とした巡視点検を瀬田月輪団地の主要施設について行っている。

巡視点検は右の点検表に基づいて行っている。施設巡視点検表で示された数値は建物の状況調査による部位ごと(屋上防水、外壁、建具、内装等)における修繕優先度を示し、数値が大きいほど改修の優先度が高いことを表す。優先度は、劣化度、緊急性に加え、教育・研究に対する影響度や修繕規模、利用頻度等の評価基準を設定し、必要性を点数化している。

本部管理棟、看護学科校舎といった建物において老朽化が進んでいることがわかる。これらの建物の改修のほか、雨漏れ等を未然に防ぐための部分修繕工事も計画的に実施していかなければならない。



区分	点検内容・方法	点検結果 (事項あり1・事項なし0)	係数	点数	計
屋上	防水	シート防水に傷はあるか シート防水が剥れている又は浮いている箇所があるか アスファルト防水の保護コンクリート目地に亀裂・損傷等があるか	5	0	0
	パラペット	濡れ、ルーフトレンドレンにゴミ・泥等が堆積しているか パワベットのコンクリート又はモルタル塗木のひび割れ、浮き、剥離等があるか 金属塗木の变形、さび、損傷の有無及び取付け状態(剥離・脱落及びビスの緩み)の良否を点検する。	5	0	
外壁	共通事項	クラックはあるか 露筋している箇所はあるか モルタル・コンクリートの爆裂はないか 仕上材(吹付け材)のはく離・影れ・剥がれはあるか	5 5 5	0 0 0	0
	建具	開閉作動状態の良否を点検する。 丁番及びドアローザの取付け状態ならびに作動状態の良否を点検する。 ガラス留め材が剥離していないか ガラスに傷や割れがあるか	1 1 3	0 0 0	
内部床	共通事項	ドア本体作動時の異常音の有無を点検する。	0	0	0
	内装	仕上材のはく離又は浮きの有無を点検する。 塗装仕上、吹付け材 剥離、欠け、汚れ及び変色の有無を点検する。	1 1	0 0	
内部天井	天井張り	剥離、破れ、摩耗、汚れ及び変色の有無を点検する。	1	0	0
	各種ボード張り等	ひび割れ、浮き及び破損の有無を点検する。	1	0	
内部建具	開閉作動状態の良否を点検する。	1	0	0	
	丁番及びドアローザの取付け状態ならびに作動状態の良否を点検する。 建具 ガラスの傷及び割れの有無を点検する。	1 1	0 0		
その他	タラップ 変形及び腐食の有無を点検する。 浮遊・丸環 取付け部の状態、変形、破損、さび及び腐食があるか エキスパンションジョイント 漏水、変形、さび、腐食の有無並びに取付け状態の良否を点検する。	1 1 1	0 0 0	0	
合計					0

この欄に記入すると自動計算され数値がでる。

※FCIは1000m2以下の建物については算出していません

マスタープラン巡視点検結果一覧

棟名称	FCI	巡視点検結果								
		屋上	外壁	外部建具	内部床	内壁	内部天井	内部建具	その他	合計
MRI-CT施設	-(※)	11	5	0	0	0	0	0	0	16
臨床研究棟	0	0	5	3	3	1	0	0	0	12
附属病院	0.01	11	0	0	0	0	0	0	0	11
本部管理棟	0.62	11	0	0	0	0	0	0	0	11
実験実習支援センター	0	0	5	0	3	1	1	0	0	10
神経難病研究センター	0.02	10	0	0	0	0	0	0	0	10
看護学科校舎	0.10	10	0	0	0	0	0	0	0	10
MRT装置棟	-(※)	6	0	0	0	0	0	0	0	6
実験実習支援センター(RI部門) 動物生命科学研究センター	0.64	6	0	0	0	0	0	0	0	6
基礎実習棟	0	6	0	0	0	0	0	0	0	6
図書館・コラボレーションセンター	0	6	0	0	0	0	0	0	0	6
臨床講義棟	0	5	0	0	0	0	0	0	0	5
基礎研究棟・一般教養棟	0.55	0	0	0	0	1	0	0	0	1
動物生命科学研究センター(IV期)	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
福利棟	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
高エネルギー治療施設	-(※)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
体育館	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
アジア疫学研究センター	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
スキルズラボ棟	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

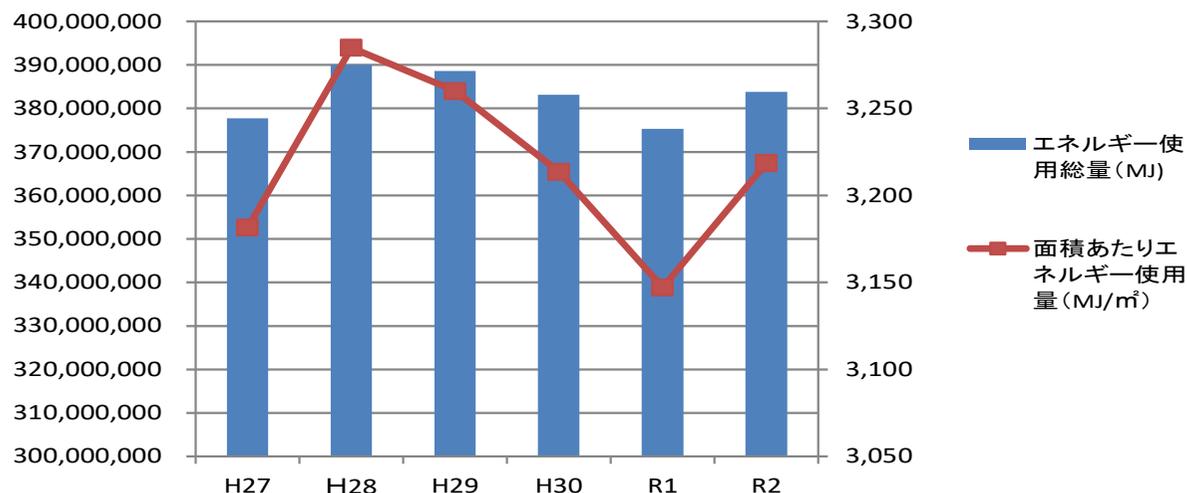
### 3. 現状と課題

#### 3-3. エネルギー 3-4. 面積

##### ■エネルギー消費に関する問題点

本学のエネルギー消費の状況を右図に示す。  
 近年は減少傾向(R2年度は、コロナ禍による空調稼働状況の変化によるものと考えられる)を示してはいるものの、面積あたりエネルギー消費量は同種の建物と比較して多い。  
 原因としては、空調の消費エネルギーが大きいことがあげられる。現行の熱源システムは、大型のボイラーと冷凍機を中央に置く中央式が主体となっており、これらの設備が古くなって最新の機種と比較すると省エネ性能で大きく見劣りするようになっているのが主な原因である。

エネルギー消費量



##### ■電気・ガス使用量の見える化

まるっと滋賀医大に「エネルギー使用状況」の専用ページより、学内教職員向けに毎月公表している。

エネルギー使用状況

本学ではエネルギー使用量について【前年比の1%削減】を目標に取り組んでいます。

本ページでは、本学教職員及び学生のみなさんの省エネ推進への意識向上を目的として、建物単位（電気室単位）での電力使用量及び全学でのガス使用量を集計し、それらの使用量及び一次エネルギー使用量（電気使用量及びガス使用量を元に算出）を月毎に掲載しています。

省エネは、物理的な取組み（LED化、高効率空調機への更新、複層ガラス・断熱材吹付の採用、人感センサーの取付等）以上に「一人一人の意識向上/小さなことの積み重ね」が重要です。

※前年度同月との使用量等の比較結果が一目でわかるよう、以下の「アイコン表示」を行っています。

😊 >>>> 使用量等が減少した      😞 >>>> 使用量等が増加した

一次エネルギー使用量

一次エネルギー使用量（全学）  
 二次エネルギー使用量（全学） 累計・削減率

前年度同月との比較

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
😊	😊	😊	😊	😊	😊	😊	😊	😊	😊	😊	😊

電力使用量

電力使用量・削減率（全学） 月別

4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月

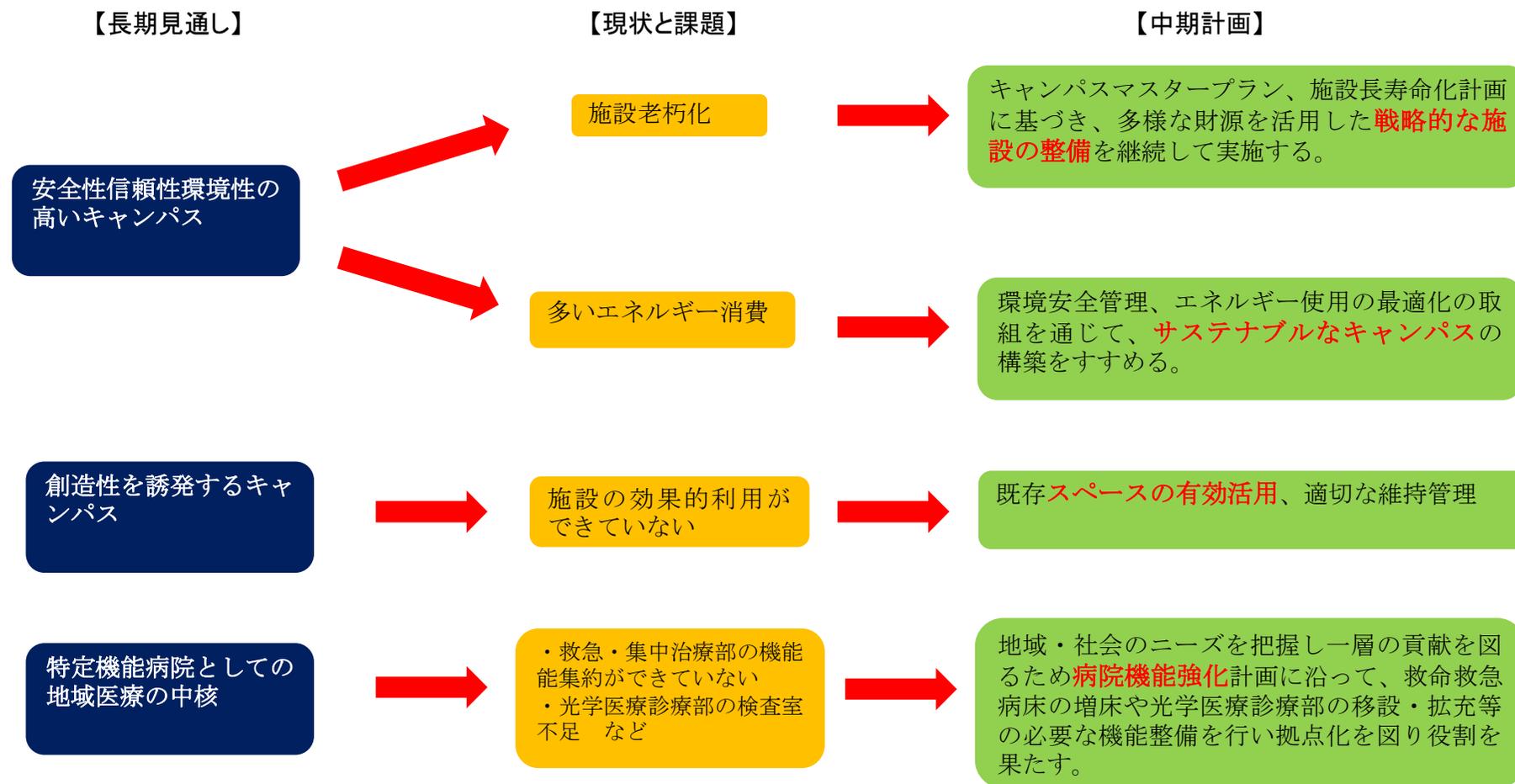
前年度同月との比較

まるっと滋賀医大の「エネルギー使用状況」

## 4. キャンパス中期計画2022～2027

### キャンパス中期計画(2022～2027)

「1キャンパスの長期的見通し」で解説した大学理念、基本的な目標及び施設整備方針を実現するため、第4期中期目標では、施設設備の整備・活用等に関して「大学の機能を最大限発揮するための基盤となる施設及び設備について、保有資産を最大限活用するとともに、全学的なマネジメントによる戦略的な整備・共用を進め、サステナブルなキャンパスの実現を目指すとともに、地域・社会・世界に一層貢献していくための機能強化を図る。」ことを目指すこととした。これらの方針・目標をブレイクダウンし、さらに前章で分析した現状と課題を加味して、今期における中期計画を以下のとおり設定した。



#### 4. キャンパス中期計画2022～2027

中期計画とそれを実現するための実施計画及び実行スケジュールは以下のとおりである。

中期計画	実施計画	第4期中期計画期間					
		2022	2023	2024	2025	2026	2027
キャンパスマスタープラン、施設長寿命化計画に基づき、多様な財源を活用した <b>戦略的な施設の整備</b> を継続して実施する。	キャンパスマスタープラン、インフラ長寿命化計画に基づき、老朽化した施設・設備を順次改善する。また、施設整備に合わせて、キャンパスのイノベーションコモンズ化(※1)を目指す。						
	屋内・屋外環境の点検評価を実施し、インフラ長寿命化計画に反映する。						
既存 <b>スペースの有効活用</b> 、適切な維持管理	スペースの利用状況を把握しスペース再配分する。						
	スペースの利用方針(全学的なスペースチャージ等)を検討、策定する。						
環境安全管理、エネルギー使用の最適化の取組を通じて、 <b>サステナブルなキャンパス</b> の構築をすすめる。	環境憲章に基づく環境に関する計画(サステナブルキャンパス計画)を検討、策定する。						
	省エネルギー計画、サステナブルキャンパス計画を実施する。						
地域・社会のニーズを把握し一層の貢献を図るため <b>病院機能強化</b> 計画に沿って必要な機能整備を行い拠点化を図り役割を果たす。	病院機能強化計画に基づき、整備を実施する。						

※1 「キャンパスのイノベーションコモンズ(共創拠点)化」

第5次国立大学法人等施設整備5か年計画(2021～2025)で新たに追加された施設整備の方向性である。今後、国立大学等が「共創」の拠点としての役割を果たすため、キャンパス全体を「イノベーションコモンズ」へと転換していくことを目指す。

(P27 5-14 イノベーションコモンズ化計画参照)

## 5. 部門別計画

### 5-1. ゾーニング計画

本学理念である「特色ある教育・研究」を実践するため、本学キャンパスに「教育・研究ゾーン」「病院ゾーン」、さらにそれらの活動を支える「福利厚生ゾーン」「管理ゾーン」「運動施設ゾーン」「駐車場ゾーン」を設置することで、秩序あるキャンパス構築を行う。

特色ある教育・研究の推進という視点からみると、本学は新たな教育の潮流であるアクティブラーニングへの対応が遅れているため、「教育・研究ゾーン」における、アクティブラーニングへの対応を重視していく。加えて自主学習室の不足に対する不満が学生から届いており、それが医師国家試験合格率低下や本学魅力度低下を招きかねない状況も考慮し、新たに整備するアクティブラーニングスペースは、学生自主学習室等にも対応できる多目的利用室とする。

また、「病院ゾーン」では再開発時の想定以上に病院活動が活発化しており、既存施設では対応しきれなくなっているため、手術室増室を中心とした病院機能の強化を重点的に行っていく。

さらに、公共交通機関が不便な本学の立地条件では駐車場は今後の大学経営を左右しかねない重要事項であるため、すべての自動車通勤通院を受け入れるコンセプトの下、駐車場の充実にも注力していく。

#### 教育・研究ゾーン

- ・講座研究室、講義室、実験室、全学共同利用施設、産学連携施設を配置する。
- ・ほとんどの構成員が関与するため、キャンパス中心に近い場所に設置する。
- ・効果的効率的な施設を目指して類似機能を集約し、比較的高層建物を高密度に配置していくことで将来対応スペースを確保する。
- ・教員や学生からの要望が多いアクティブラーニングスペース(学生自主学習室・OSCE会場)のためのスペースを学生動線の中心に近いところに集約的に確保する。
- ・中庭に面した部分は、中庭からの景観を重視し、落ち着いた色彩材料でかつ壁面線をそろえる。
- ・学内共同利用施設(実験実習支援センター)は、研究者が使いやすいよう、教育・研究ゾーンの中心に近い位置に配置する。
- ・産学連携施設(メディカルイノベーションセンター)は、外部研究者の利便性を考慮して、教育・研究ゾーンの中心で、かつ駐車場に近い位置に設置する
- ・学外共同利用施設(動物生命科学センター)は、大学間共同拠点化を目指して、教育・研究エリアの中央で、駐車場やエネルギー供給施設近辺に設置する

#### 病院ゾーン

- ・病院及び関連施設を配置する。
- ・効果的効率的な施設を目指し比較的高層建物を高密度に配置していくことで、将来対応スペースを確保する。
- ・病院玄関に面した部分は低層建物とし、落ち着いた色彩材料でかつ壁面線をそろえる
- ・再開発時の想定以上に病院活動が活発化しており、病院施設が追い付かなくなっている。今後、手術室やICU増床などの病院機能強化を行うため、駐車場ゾーンを隣接させることで、将来の病院ゾーンの拡大がスムーズにできるようにする。

#### 福利厚生ゾーン

- ・学生自主学習スペースや食堂、購買等を配置する。
- ・中庭を中心としたゆとりとにぎわいのスペースを創出する。中庭を囲む形で福利厚生ゾーンと教育・研究ゾーンを配置し、これらのゾーンを歩行者主要動線で接続することで、構成員の交流を促す。
- ・中庭入口付近にあるシンボリック樹木を「変えない部分」として継承し、緑地を集中的に配置。
- ・低層建物を低密度に配置。

#### 管理ゾーン

- ・事務やインフラ施設を配置する
- ・インフラ施設は病院に近い位置に設置する。
- ・中庭に面した部分は、ゆとりと賑わいのスペースの一部として、低層建物で落ち着いた色彩材料でかつ壁面線をそろえる。

#### 運動施設ゾーン

- ・学生用体育館やグラウンドを設置する。
- ・今後予想される厳しい大学運営を考慮して必要な機能の絞り込みを行う。
- ・外周道路外側にまとめて配置することで将来対応に備えた用地とする。

#### 駐車場ゾーン

- ・外周道路外側にまとめて配置し、外周道路内側を歩行者専用とすることで、キャンパス環境を良好に保つ
- ・今後予想される病院患者増に備えて、すべての患者や職員の自動車利用を受け入れる立体駐車場増設などの効率的利用をすすめ、余剰となったスペースを病院ゾーンの充実にあてる。
- ・外周道路外側にまとめて配置することで将来の病院再開発に備えた用地とする。

## 5. 部門別計画

### 5-1. ゾーニング計画

#### ■ 基本的考え方

外周道路に囲まれた一帯の東半分を主に病院ゾーン、西半分を主に教育・研究ゾーンとしている。

教育・研究ゾーンと病院ゾーン、管理ゾーン（事務）を近接して設置することで円滑な教育・研究活動に配慮している。  
教育・研究ゾーンに隣接して福利厚生ゾーンを配置し、歩行者動線で接続することで構成員の交流を促進する。

外周道路外側は駐車場ゾーン及び運動施設ゾーンとする。これらのゾーンは、病院再開発など、将来の大きな変化に備えた用地とする。

各ゾーン間には緑地や歩行者動線を設けキャンパスにメリハリを与える。

#### 産学連携施設の集約的配置

研究ゾーンの中心に近く、かつ駐車場やエネルギー供給施設に近い位置に配置することで利便性に配慮

ゆとりと賑わいスペースとしての福利厚生ゾーン  
低層建物を低密度に配置建物色彩や在室、壁面線を統一、憩いの空間としての緑地を集中的に設置整備  
大学祭等では地域からの来訪もあるため、大学中心部でかつ駐車場からのアクセスの良い配置とする。

緑の景観を重視した緑地ゾーン  
キャンパス南側公道からの景観を重視

#### 教育・研究ゾーンの集約

類似機能を集約し比較的高層建物を高密度に配置

#### 学内共同利用施設の集約的配置

大型機器等の学内共同利用施設（実験実習支援センター）を研究ゾーンの中心に近く、かつ駐車場やエネルギー供給施設に近い位置に配置することで利便性に配慮

#### 排ガス発生施設の分離

ボイラーが発生する排ガスは、居住域から離れた場所で排出する

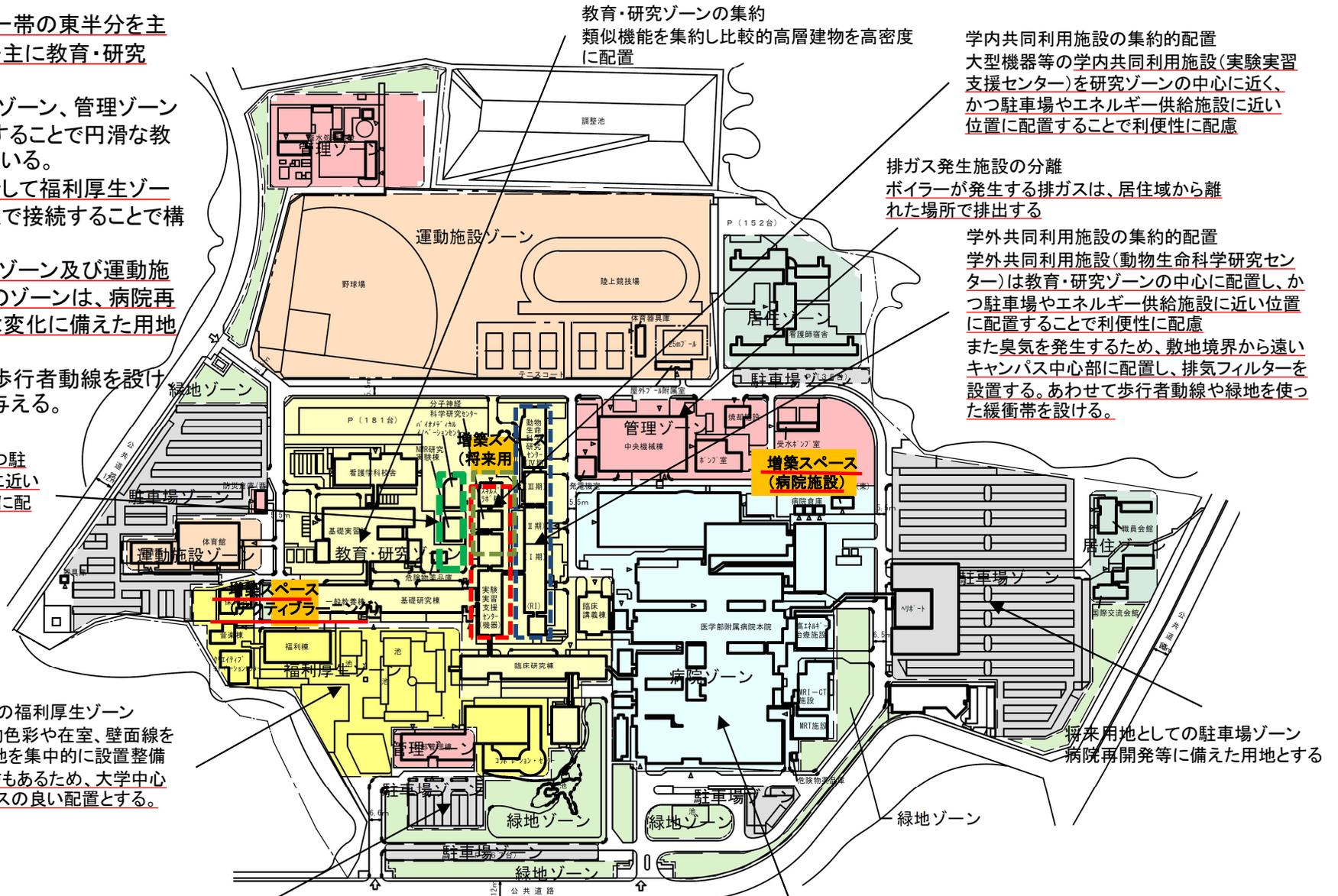
#### 学外共同利用施設の集約的配置

学外共同利用施設（動物生命科学研究センター）は教育・研究ゾーンの中心に配置し、かつ駐車場やエネルギー供給施設に近い位置に配置することで利便性に配慮

また臭気が発生するため、敷地境界から遠いキャンパス中心部に配置し、排気フィルターを設置する。あわせて歩行者動線や緑地を使った緩衝帯を設ける。

#### 病院ゾーンの集約

効果的効率的な病院スペースを創出  
比較的高層建物を高密度に配置

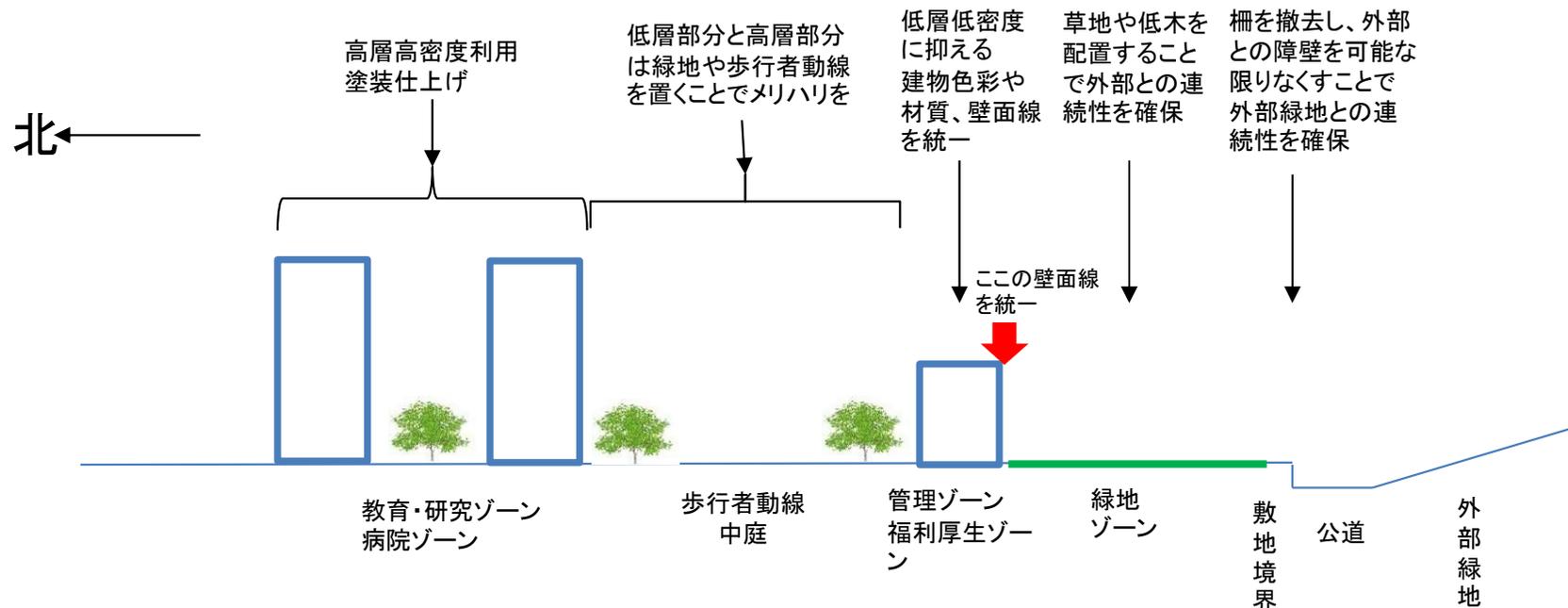


## 5. 部門別計画

### 5-2. デザインガイドライン

#### ①周辺環境との連続的環境整備

大学正門や病院正門が位置するキャンパス南側公道から見たときに手前から草地ゾーン、低層建物(福利厚生ゾーン、管理ゾーン)、高層建物(教育・研究ゾーン)へとつながる景観となるような建物配置とすることで周辺環境との調和をはかる。



#### ②統一感のある材料の選択

建物外装、色彩等がある範囲で統一することで建物群の調和をはかる。低層建物(福利厚生ゾーン、管理ゾーン)の仕上げは、大学を象徴できるよう、落ち着いた色彩材料でかつ壁面線をそろえる。高層建物(教育・研究ゾーン、病院ゾーン)の仕上げは塗装を中心とした簡素な仕上げとする。色彩については、大学の印象を低コストで管理できる手法という意味で重要である。ベージュの落ち着いた自然色を基調としつつ、それだけではキャンパスの印象が希薄になる恐れがあるため、部分的には積極的に鮮やかな色(大学イメージカラーである青)を使っていく。以上の方向性の下、建物の形状、色彩、主要な材質についての詳細を示したデザインガイドラインを作成する。その際には再生可能な材料やリサイクル材の活用など、環境負荷の少ない材料の採用を推進する。また、建物寿命80~100年と設定したインフラ長寿命化計画の下、それを実現できる見込みのない材料は採用しない。

#### ③オープンスペースの配置

低層建物(福利厚生ゾーン・管理ゾーン)は中庭に面し、職員のやすらぎのスペースに位置するため、建物密度を低くする。高層建物(教育・研究ゾーン、病院ゾーン)は、効果的効率的な教育・研究活動を進めるため、建物密度を高く設定する。建物間の歩行者動線には落葉広葉樹を中心とした緑地を設けることでキャンパスにメリハリを与え、圧迫感をやわらげ、また室内環境の調整や目隠しの役割を設ける

#### ④エネルギー負荷低減を意識した建物構造

建物のエネルギー消費量を抑制するため、高層建物については吹き抜け部分を利用した自然換気システムを導入する。滋賀県は水資源に比較的恵まれていることから、井水を積極的に導入する(上水、中水への活用)。

## 5. 部門別計画

### 5-3. スペース有効活用の計画

本学のスペース活用状況は、40年以上前の開学当初から基本的に変わっておらず、その硬直性、非効率性が大きな問題である。限られた資源である本学スペースを有効に活用するため、以下のような対策を進めていく

#### 1) 教養教育スペースの見直し、再配置

講義室の稼働率向上：本学平均58.8%（令和2年度）→更なる稼働率向上を目指す  
実習室、実験室等教養教育スペースの共用化、稼働率向上

#### 2) 学生支援スペースの創出

Post-CC OSCE対応、点在する多目的室、スキルズラボを集約するなど  
学生の溜まり場、アクティブ・ラーニングスペースの創出

#### 3) 研究室の狭隘解消（平準化）

スペースチャージなどの方策を駆使して人員一人あたり面積（平均）の平準化を目指す

- ・基礎医学講座 約42㎡ ← スペースの縮減
- ・臨床医学講座 約10㎡ ← 狭隘の解消
- ・看護学科講座 約24㎡ ← 標準（平成29年度に縮減・集約）

#### 4) 研究ユニットへのスペース配分

教教分離の基本方針のもと、既存の講座、領域、センターの再編、統合を含めた組織再編（ユニット化）を行い、ユニットに対してスペース配分を行う。

#### 5) 共用研究室の設置

キャンパスの限られたリソースを最大限に活用し、多様な施設ニーズに柔軟に対応して教育・研究医療活動を支援するため、ユニット毎に共用研究室を設置する。また戦略的にプロジェクト研究スペースを創設し、施設担当理事が所掌する共用スペースとして、建築・環境委員会でマネジメントする。



## 5. 部門別計画

### 5-4. 今後の整備予定建物等の計画

2020年度から病院将来構想検討委員会で検討をおこない「滋賀医科大学医学部附属病院マスタープラン2020」を策定した。マスタープランに基づき、以下のとおり整備する計画としている。

#### ■再開発整備

・本院は1978年建設から27年後の2005年から2011年にかけて再開発が行なわれた。

#### ■再々開発（建替）整備

・次の再々開発は、再開発整備から建物設備の更新限界である約25年が経過する遅くとも2033年から行う計画とし、建設後63～73年が経過する建物を対象に建替を行う計画とする。

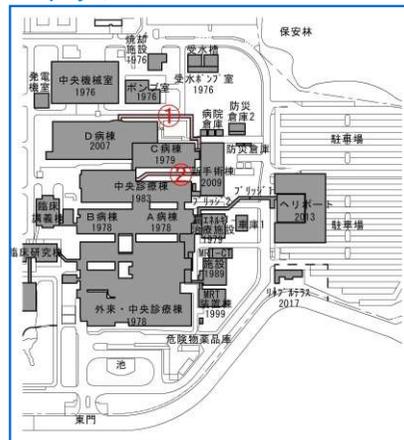
・債務償還計画からも、再開発整備（約202億円）後すべての償還を終える2041（2036年整備分）年頃の整備が望ましい。

#### ■機能強化棟（Ⅰ期棟）整備

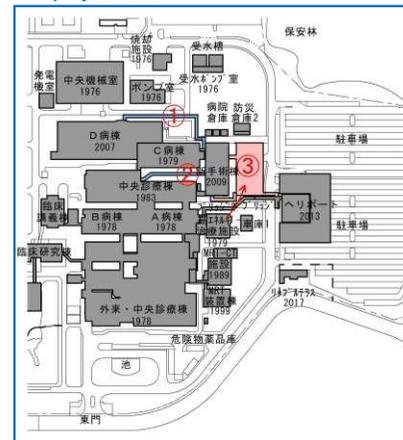
・機能強化棟は、再開発整備から10年を経過した2021年（令和3年）から整備を行う計画とする。

### 機能強化整備（2021～2026年）

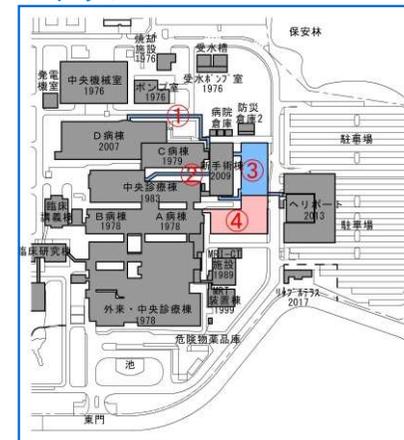
#### ステップ1



#### ステップ2

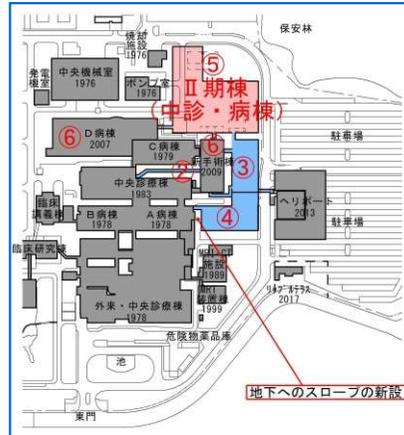


#### ステップ3



### 再々開発（建替）整備（2033～2052年）

#### ステップ4



#### ステップ5



#### ステップ6



## 5. 部門別計画

### 5-4. 今後の整備予定建物等の計画

#### <職員宿舎の整備について>

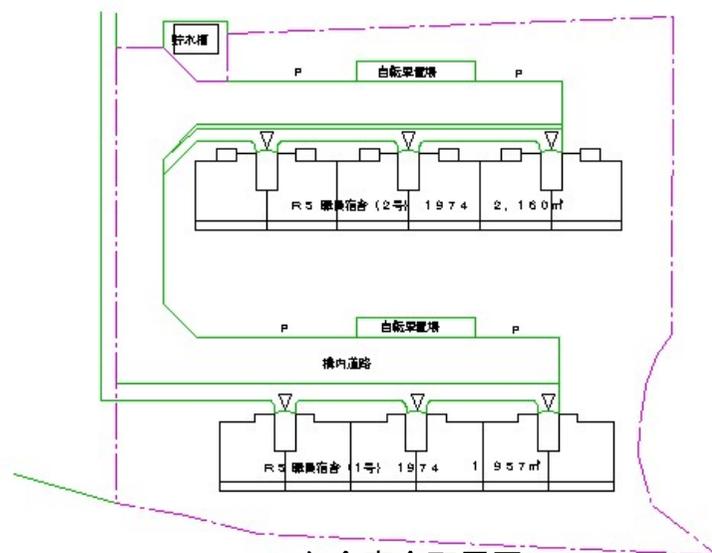
職員用宿舎として本学には南笠宿舎(総延べ床面積7,581m<sup>2</sup>)矢倉宿舎(総延べ床面積4,117m<sup>2</sup>)の計11,698m<sup>2</sup>が設置されている。

これらは開学当初に整備された建物で、築40年程度を経て老朽が進んでおり、国内外の優秀な研究者を迎える際の障害になっている。規模も大きいため、宿舎がどうしても必要といえない人まで入居してしまっている。加えて南笠宿舎ABC棟は耐震性が十分でない。

そこで、職員用宿舎の縮小整理を行う。

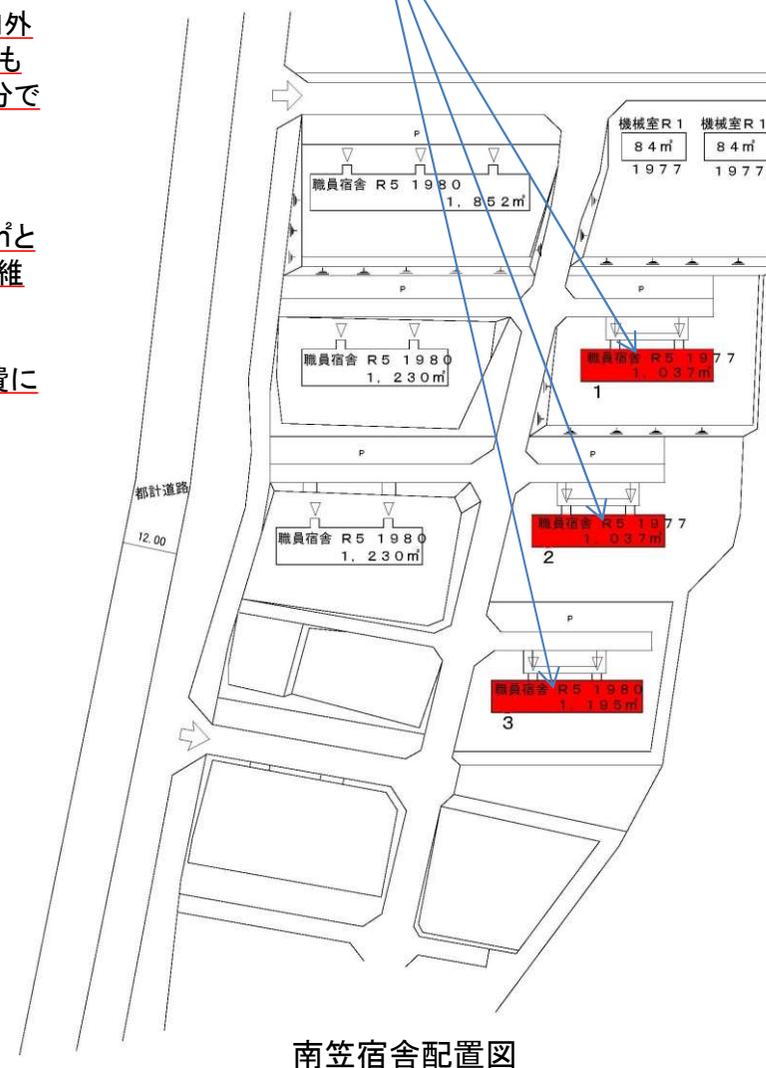
具体的には耐震性の低い南笠宿舎ABC棟3,269m<sup>2</sup>は取り壊すこととし、DEF棟4,312m<sup>2</sup>と矢倉宿舎4,117m<sup>2</sup>の計8,429m<sup>2</sup>については、配管等の改修を加えたうえで宿舎機能を維持する。費用は宿舎費収入をもとにしたPPP契約または目的積立金を充てる。

あわせて、入居者について真に大学運営に必要な医師や研究者に絞り込み、宿舎費についても見直しを行っていくなど、運営面についても見直しを進めていく。



矢倉宿舎配置図

#### とりこわし計画建物



南笠宿舎配置図

## 5. 部門別計画

### 5-5. 交通計画

#### ■ 基本的な考え方

本学は天津市と草津市の境の丘陵地に位置し、駅からも距離があるため、交通の便がよいとはいえない。そのため、教職員や病院患者の多くが自動車による来学を余儀なくされており、これらの人々をすべて受け入れることができるようにすることは、大学の今後を左右する重要課題である。現在は、職員用として西門駐車場(432台)や病院職員駐車場(551台)など計1519台、さらに患者用駐車場として553台分を整備している。

駐輪場は、基礎実習棟南側、体育館南側、看護学科校舎西側、臨床講義棟西側、附属病院西側に設置されている。利用者が多く体育館南側以外の駐輪場はスペース内に納まりきれないため路上にはみ出して駐輪している。

#### ■ 問題点

教職員や病院患者の数が増えてきたこと、自動車利用率が上がってきたことにより、駐車場需要は大きくなる一方である。近年では駐車できない車両が駐車場からあふれる事態も起こっており、根本的な対応が必要となりつつある。

駐車場が不足してきたことにより駐輪場の要望も大きくなっているが、講義室から遠い駐輪場の利用率が低く、また、放置された自転車等により駐輪場が有効にスペースを活用できていない。

#### ■ 今後の方向性

自動車通勤通院希望をすべて受け入れるという基本的考えのもと、駐車場の増設を行う。当面50台程度の増設を行い、その後は隣接して建設予定の県立体育館に設置される駐車場の借用も検討していく。費用は駐車場利用者が支払う駐車料金からねん出することで、自動車利用の抑制も狙う。

駐輪場も今後状況をみながら増設を行って自転車利用を促し、不要不急な自動車は抑制する。少子高齢化という本学をとりまく状況を考えると、学生の減少も考えられることから、当面は仮設駐輪場の設置により対応する。

駐輪場は、利用が多い病院玄関周辺と臨床講義棟周辺を増強する。

その他、病院玄関前を整備し、バスをより利用しやすい形で校内に引きこむほか、バス便終了時間の延長を交渉していく。

#### ■ 駐車場増設計画

ステージ0(2021)

キャンパス内の未利用地を駐車場に改修して117台分を確保

ステージ1((2024ころ目途)

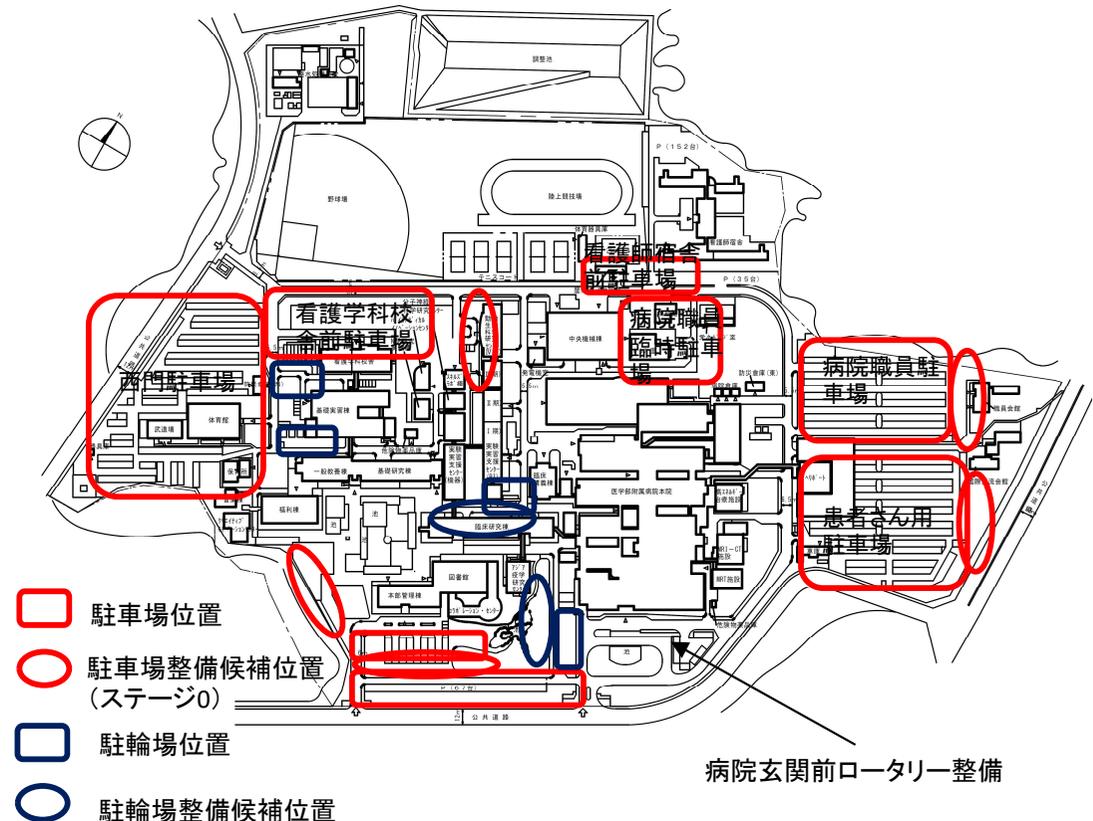
病院玄関前ロータリー(バス停)の整備

ステージ2(2024ころ目途)

駐車場需要をみすえながら隣接する県立体育館(新築)に設置される駐車場の借用またはキャンパス内での立体駐車場等設置を検討

#### ■ 駐輪場増設計画

病院玄関周辺に約50台分、臨床講義棟周辺に約30台を増設



## 5. 部門別計画

### 5-6. 動線計画

#### 【動線計画】

##### ■ 基本的な考え方

車両動線として職員自動車動線、病院患者自動車動線、緊急自動車動線、公共交通機関動線を、そのほかに歩行者動線を設定する。

教育・研究ゾーン及び病院ゾーンを取り囲む形で外周道路を配置、さらにその外側に駐車場ゾーンを配置する。自動車の進入は外周道路までとし、外周道路内側の病院ゾーン及び教育・研究ゾーンには自動車の進入を認めないことで良好なキャンパス環境を確保する。外周道路内側に教育・研究・診療のほとんどの大学機能を集中させ、外側は緑地や駐車場中心の構造とすることで、景観や移動距離短縮といった快適性に配慮する。

##### ■ 問題点

病院玄関付近は患者自動車動線と公共交通機関動線、緊急自動車動線が交錯しているため、安全性、特に緊急自動車の対応に不安がある。

自動車の進入を管理する遮断機が各駐車場入口にあるため、無許可者が道路上に駐車する事例が発生している。

構内動線がはっきりしないエリアがあり、学外者に対する案内性が悪い。特に大学正門が目立たないことにより、にぎわいの中心である中庭と正門との間の動線が不明瞭となり、大学のアイデンティティに影響を及ぼしている。

##### ■ 今後の方向性

###### (1) キャンパス進入路の設置

自動車の交通量、とくに病院患者数の増加により病院出入口に渋滞が発生し公道にまで影響をおよぼしていること、また患者自動車動線と公共交通機関動線、緊急自動車動線が錯綜しているため、新たな患者用進入路を設置し、患者動線と公共交通機関動線、緊急自動車の動線を分離することで、安全性と利便性の向上を図る。進入路を長くすることで、駐車場待ちの列を学内にとりこむことも行う。

###### (2) 既存道路の拡幅、歩道の強化

道路幅が十分ではないところがあるため、道路幅を拡幅する。また、外周道路は自動車と歩行者が共存するため、歩行者の安全確保を目的とした歩道の強化を行う。

歩道を強化する。

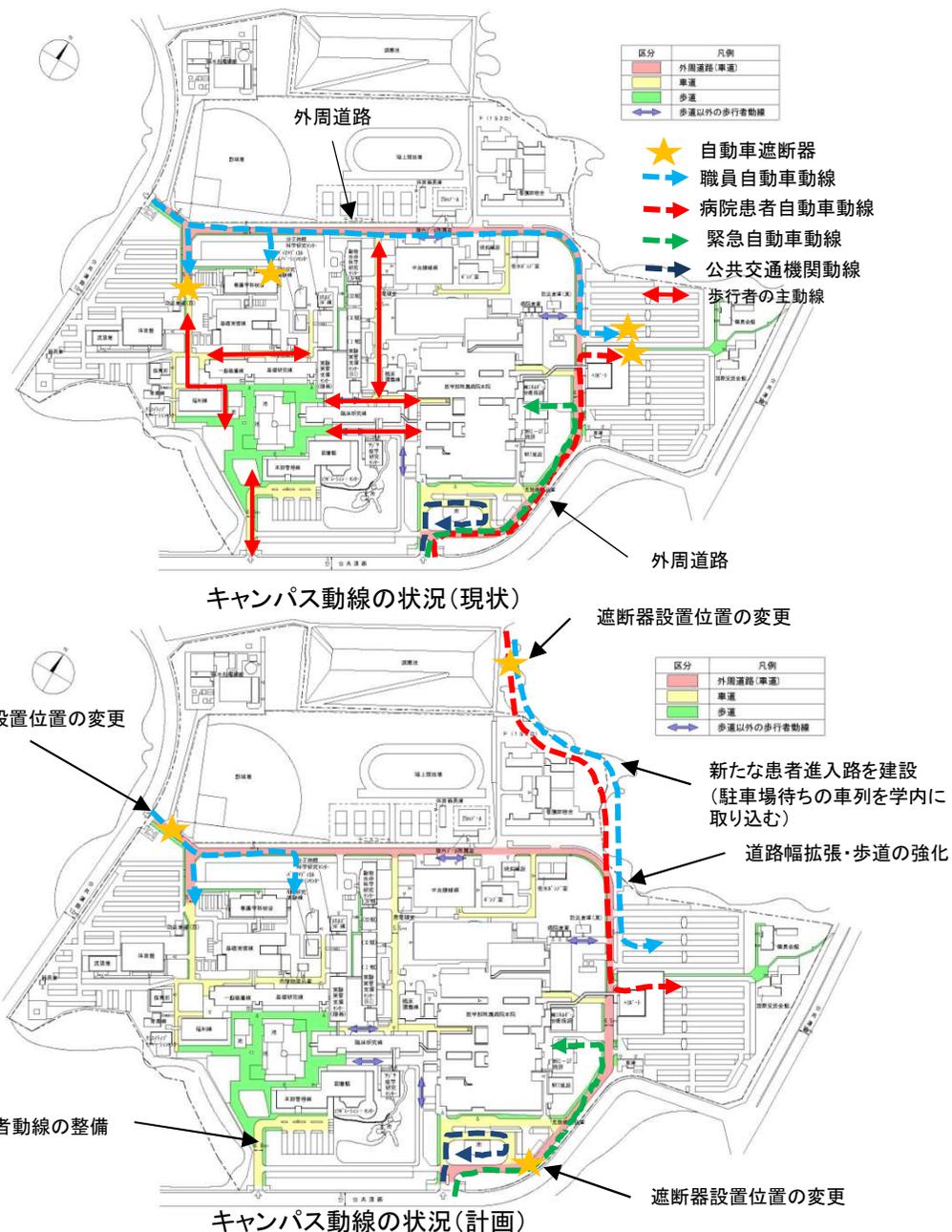
###### (3) 進入車両の制限

現在各駐車場入口に設置されている自動車遮断器をキャンパス入口に設置することで許可のない車のキャンパスへの無秩序な進入を防ぐ

###### (4) 正門から中庭への歩行者動線の整備

大学正門から中庭への動線を拡幅整備することで動線を明確にする(パブリックスペース計画参照)

中庭から正門への歩行者動線の整備



## 5. 部門別計画

### 5-7. パブリックスペース計画

#### ■ 基本的な考え方

本学は周囲を緑に囲まれた丘陵地帯に位置しており、本学も開学以来緑地の保持に力を入れてきた。大学正門と中庭にはシンボリックな樹木を配置し、その樹木を中心とした緑の広がりを意識できる構成としている。さらに主に病院患者の憩いの場として、図書館南側に池をもつ庭園風の緑地を整備している。

#### ■ 問題点

大学事業の拡大や駐車場需要の増大により緑地が減りつつある。また、緑地維持にかけられる費用が減りつつあることも問題である。

#### ■ 今後の方向性

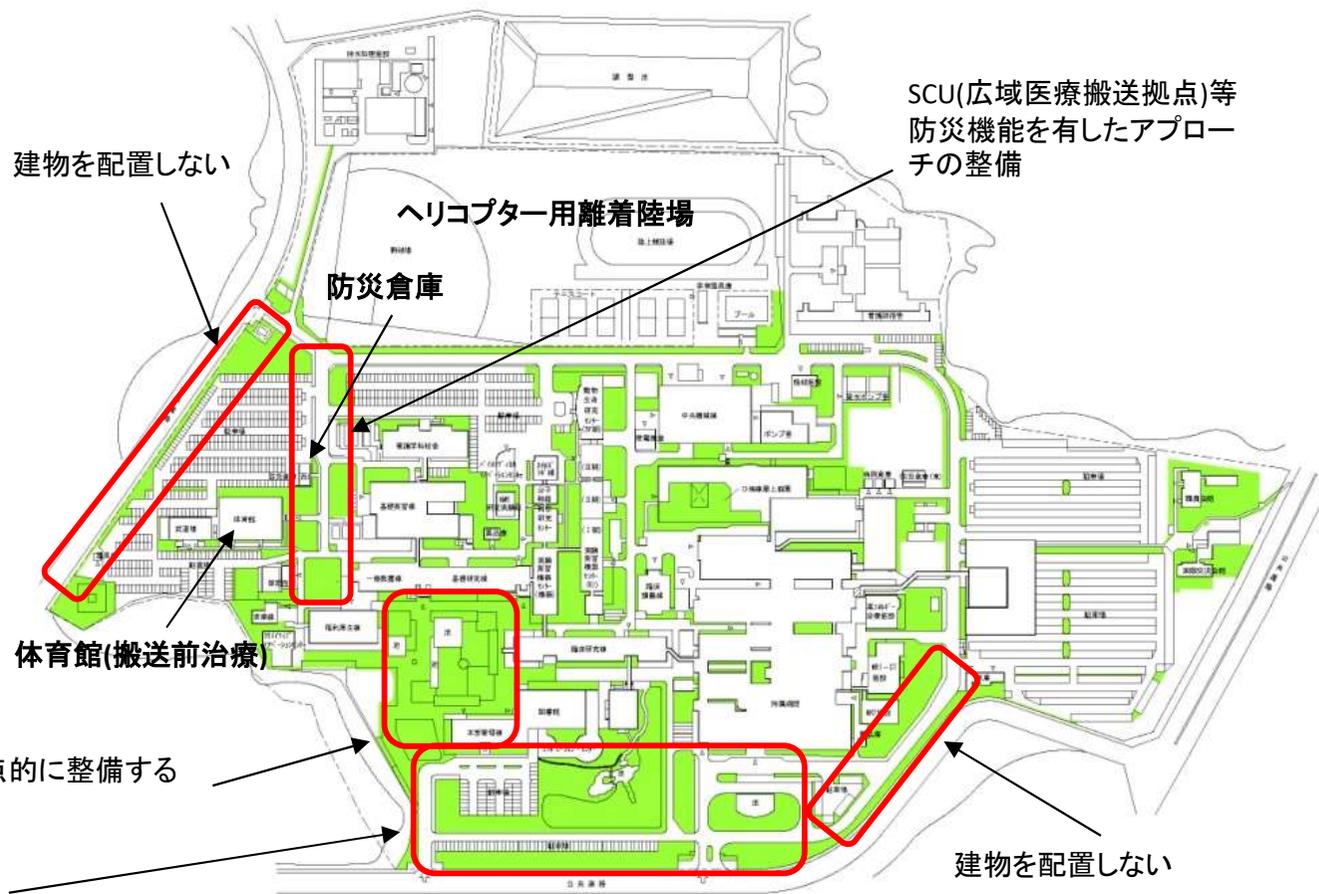
##### (1) 中庭周辺の重点的整備

中庭には、ヒポクラテスとその下で学生に医学を講じたとされ、ギリシャの親木より仕立てたすずかけの木が配置されている。その医学的由来や非日常的空間を醸し出している点からみて、中庭周辺が本学で最も印象的な場所といえる。そこで、中庭をキャンパスのイメージを印象付けられる場所として重点的に整備する(次ページ参照)

##### (2) キャンパス外緑地との一体性の確保

本学周辺は緑地に囲まれており、これらの緑地との一体性を確保し、また圧迫感を軽減するため、キャンパス周辺部(公道に接する部分)には建物を配置せず緑地帯とする。

また、大学正門や病院正門が位置するキャンパス南側は、大学の顔であり外部との一体性が特に重要であるとの考えから、緑地帯は草地や低木を中心とし、囲障もできるだけ低いものとする(デザインガイドラインのページ参照)。



## 5. 部門別計画

### 5-7. パブリックスペース計画

#### ■基本的な考え方

中庭は、毎年10月に実施される若鮎祭では、ステージを組み、その周りを各サークルが店を出し、メイン会場として利用している。大学のにぎわいの中心となるべきスペースであるが、学園祭以外では目立った使われ方をしていないため、学生・教職員が集える雰囲気を持つ場所へ整備することが必要である。

また、令和6年(2024年)度には開学50周年を迎えるため記念事業として中庭の効果的な環境整備を行う。

#### ■問題点

中庭の床タイルは雨の日に滑りやすくなっており、ひび割れ、欠け、剥がれが進んでいる。また、水溜りが出来やすい箇所があり、通行に支障がある。日影となる場所が少なく、風をさえぎる場所もないため、夏場や冬場に中庭のベンチ利用者は少ない。

正門は滋賀医大の顔となるべき場所であるが、大学名の入った銘板のサイズも小さく、附属病院への入り口となる東門や学生が通学時に通行する西門に比べて印象が薄い。

#### ■今後の方向性

教育・研究エリアと福利厚生エリアの間に位置し、キャンパス内主要動線が交差する中庭に学生・教職員がより活発に交流できる環境を整備する。また、中庭から正門にかけての動線も整備することで、人の移動に伴う交流を誘発する。

中庭は図書館や食堂、学生自主学習スペースに囲まれており、これらの施設との相乗効果も期待できる。

##### (1) 正門改修

大学の顔である正門改修を行う。

##### (2) 正門から中庭への動線整備

正門・緑地の一部を撤去し、幅5m程度に拡幅した歩道を整備することで、人の移動に伴う交流を促す。

##### (3) 中庭の整備

中庭に配置されているシンボリック樹木とその周辺を「変えない部分」として維持していくため、「ヒポクラテスの木」と命名、その木が小高い丘に一本きりつと立っているような非日常的な空間を演出していく。

中庭は、ユニバーサルデザインを取り入れ、階段部分を撤去し床面をフラットにしつつ、憩いの空間としての機能をもたせ中庭空間を抜本的にリニューアルする。その際、水溜りが出来にくいよう、透水性のある舗装材を使用する。大学側に任意で設置されている防火用水池は、撤去若しくは地中化を行う。



シンボリック樹木「ヒポクラテスの木」

## 5. 部門別計画

### 5-8. インフラストラクチャー計画

■ インフラ設備(電気設備・機械設備)について、令和2～3年度で大幅に計画の見直しを行った。

計画の詳細については、**別冊「インフラ設備長期修繕計画(電気設備)及びインフラ設備長期修繕計画(機械設備)」**を参照。

### ■ 別冊の内容

以下の各設備について、現状の課題と更新計画を掲載

電気設備・・・受配電設備、発電設備、電力貯蔵設備、中央監視設備(電気)、火災報知設備、放送設備、電話設備、入退出管理設備、監視カメラ設備、構内情報通信網設備

機械設備・・・空調熱源設備、給水設備、消火設備、ガス設備、排水設備、生活・実験排水処理施設、医療ガス設備、RI排水処理設備、昇降機設備、中央監視設備(機械)

■ 受変電設備【年次計画2】

【現状を要する方向性の説明】  
 大学構内の保守システムが複雑化している。従って保守管理の効率化を図る。高圧なシステムは高圧ケーブルを母線に接続する必要がある。トランスは保守管理が容易な高圧側に設置する。

● 保守管理(物理的・周期的)の方針  
 ③維持管理(物理的・周期的)の方針  
 ④維持管理(物理的・周期的)の方針  
 ⑤構内ガス熱源→電気熱源へシフト検討・提案

⑥整備計画の年次計画

⑦特高トランス検討

⑧整備計画の概算額

⑨維持管理計画における更新計画(目安)

⑩電気設備の更新計画(目安)

インフラ設備長期修繕計画(電気設備)【抜粋】

■ 空調熱源設備【年次計画】

①熱源更新方針

②(STEP1)冷熱システムへの検討

③(STEP1)温熱システムの検討

④(STEP1)冷熱システムへの検討

⑤(STEP1)温熱システムの検討

インフラ設備長期修繕計画(機械設備)【抜粋】

## 5. 部門別計画

### 5-9. ユニバーサルデザイン計画

#### ■ 基本的な考え方

病院施設はすべてバリアフリー新法に適合するよう整備している。  
学校部分については大規模改修時に合わせてバリアフリー化を進めている。

#### ■ 問題点

学校施設や屋外施設の多くは40年ほど前に建設されて以降改修がなされていないため、バリアフリー対策が十分に行き届いていない。

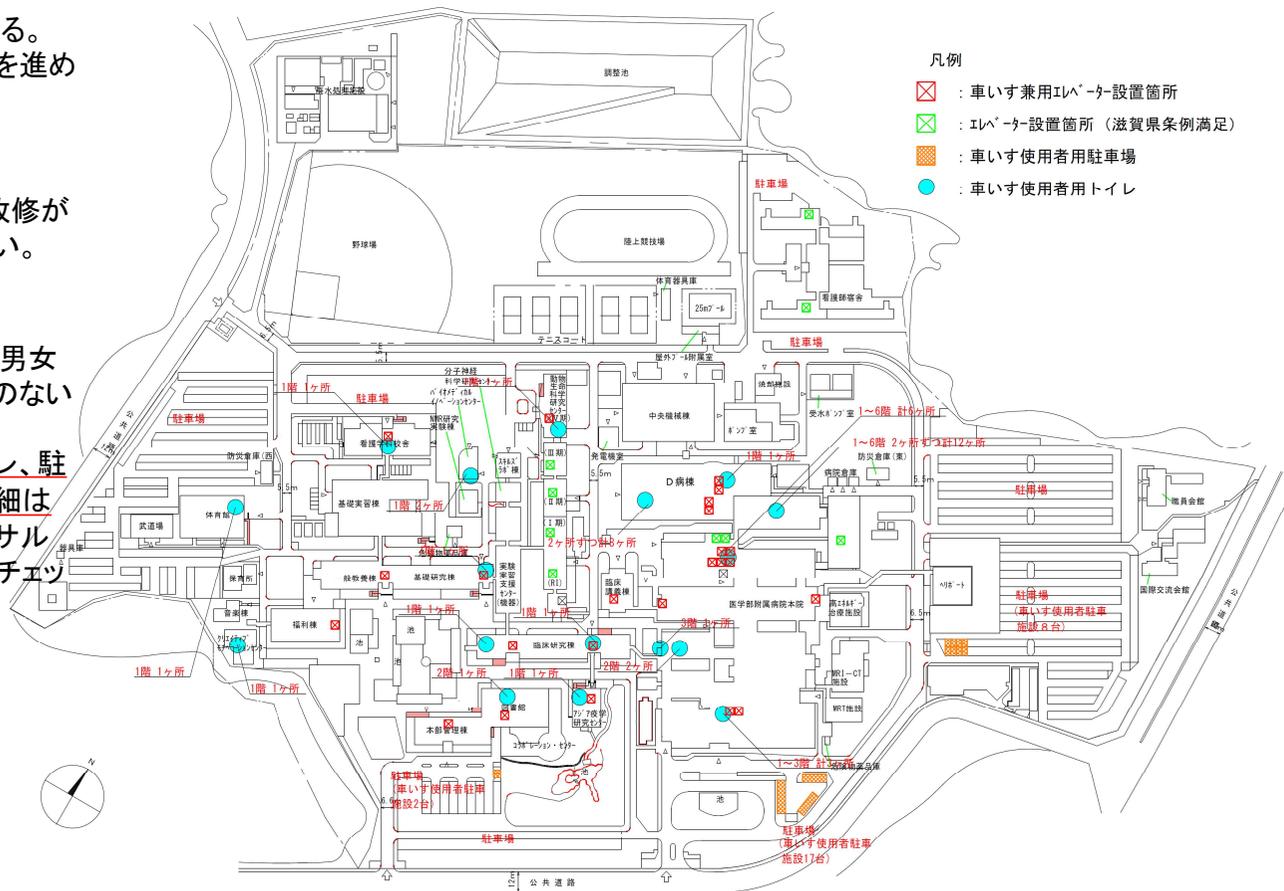
#### ■ 今後の方向性

学内の共用空間・共用施設を中心に、文化・言語・国籍、年齢・男女の差異、障害・能力の如何を問わずに誰にでも利用可能な障壁のない国際的取り組みであるユニバーサルデザインを推進する。

具体的には出入口、廊下、階段、スロープ、エレベーター、トイレ、駐車場、サインの計画的改善を行う(下表参照)。計画的改善の詳細は「ユニバーサルデザイン整備目標」において規定する。ユニバーサルデザイン整備目標の実施状況は、建築・環境委員会で定期的にチェックを受ける。

#### ユニバーサルデザインの7原則

1. どんな人でも公平に使えること(公平な利用)
2. 使う上での柔軟性があること(利用における柔軟性)
3. 使い方が簡単で自明であること(単純で直感的な利用)
4. 必要な情報がすぐに分かること(認知できる情報)
5. うっかりミスを許容できること(失敗に対する寛大さ)
6. 身体への過度な負担を必要としないこと(少ない身体的な努力)
7. アクセスや利用のための十分な大きさと空間が確保されていること(接近や利用のためのサイズと空間)



ユニバーサルデザイン整備計画

	(2021年度)	(2022年度)	(2023年度)	(2024年度)	(2025年度)	(2026年度)	(2027年度)
基礎研究棟	出入口、スロープ、廊下、階段、便所、エレベーター改修、						
R1動物実験施設		出入口、スロープ、廊下、階段、便所、エレベーター改修、					
看護学科校舎						出入口、スロープ、廊下、階段、便所、エレベーター改修、	

## 5. 部門別計画

### 5-10. 省エネ計画

#### ■問題点

本学のエネルギー消費の状況を右図に示す。本学のエネルギー消費は令和元年度までは減少傾向にあったものの、令和2年度は増加した。これはコロナ禍による空調稼働状況の変化によるものと考えられる。

また、同種の建物と比較してエネルギー消費が多く、エネルギー効率が良くない古い設備類が多数残っている。

#### ■省エネルギー方針

面積あたりエネルギー消費量を年1%削減することを目標とする。それを実現するために省エネルギー対策を実施していく。エネルギー消費状況の確認を定期的に行うとともに、電気・ガスの使用量の見える化を行い、「エネルギー使用状況」を「まるっと滋賀医大」に毎月公表する。

省エネルギー対策の主な内容は次のとおりである。

##### (1)空調機の更新

空調機の効率は大きく向上している。古い空調機を更新することで、エネルギー使用量を半減できる。

実施予定場所:基礎研究棟、RI動物実験施設、本部管理棟、病院、看護師宿舎

##### (2)照明器具の更新

照明器具の効率は大きく向上している。古い照明器具をLED照明に更新することで、エネルギー使用量を減らすことができる。

実施予定場所:基礎研究棟、RI動物実験施設、本部管理棟、病院

##### (3)変圧器の更新

変圧器の効率は大きく向上している。古い変圧器を更新することで、変圧器での損失を半減させることができる。

実施予定場所:病院、国際交流会館、中央機械棟

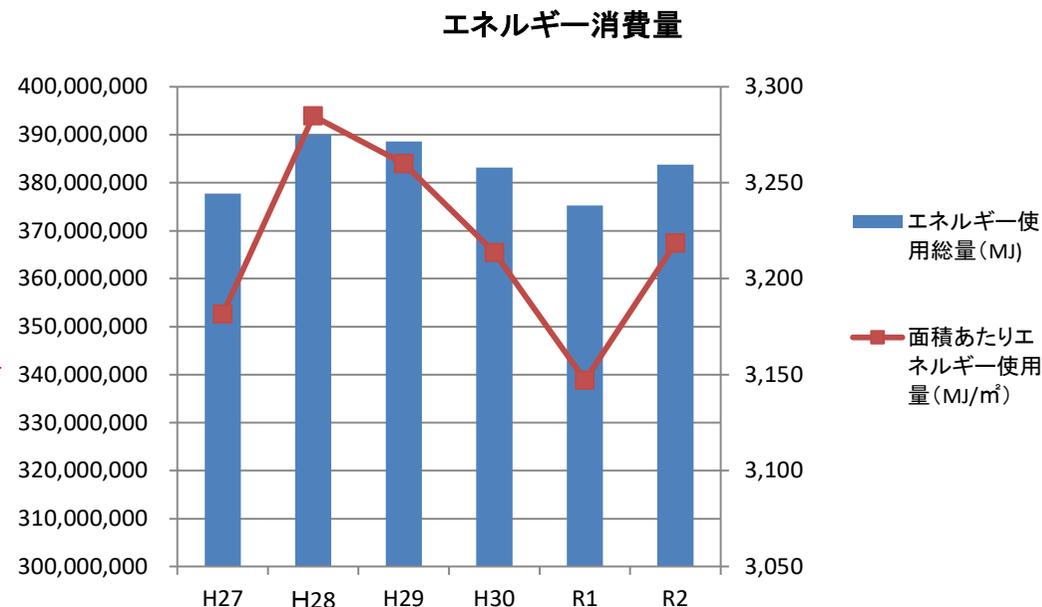
##### (4)熱源機器の更新

中央機械棟に設置されているボイラー・冷凍機は、設置から10～15年が経ち、更新を検討する時期(20年程度)に近づいている。最新型の機器は効率が大きく向上しており、30%程度のエネルギー削減が期待できる。

実施予定場所:中央機械棟

##### (5)その他

保温されていない蒸気管を保温し、放熱ロスを削減する。



## 5. 部門別計画

### 5-11. 施設維持管理計画

#### ■現状と課題

開学から40年を経て、本学の施設は老朽化が進んでいる。これらの施設を故障なく利用できる状態を、できるだけ低コストで実現していく必要がある。

#### ■施設維持管理方針

建物寿命80～100年、設備寿命20～25年を達成することを目的とした別冊の「インフラ長寿命化計画」に基づき、実施する。

建物及び設備について、定期的に点検を実施し、その結果にあわせてインフラ長寿命化計画を修正、実施していく。これらの一連の流れは建築・環境委員会でチェックを受けることとする。

#### インフラ長寿命化計画(抜粋)

設 備 名	設置場所	設置年度	過去の 更新年度	第IV期中期目標					
				R4 2022 年	R5 2023 年	R6 2024 年	R7 2025 年	R8 2026 年	R9 2027 年
・建物									
福利棟		S51 1976	H25 2013	項目 事業費		メーター更新 1,150		空調更新 17,652	
体育館		S51 1976	H25 2013	項目 事業費					
臨床講義棟		S51 1976	H25 2013	項目 事業費					
図書館		S53 1978	H26 2014	項目 事業費					
本部管理棟		S52 1977		項目 事業費	防水改修 7,521				
臨床研究棟		S51 1976		項目 事業費					
実験実習機器センター I期		S52 1977		項目 事業費					
実験実習機器センター II期		S63 1988		項目 事業費					
RI動物実験施設 I期		S52 1977		項目 事業費	改修 166,434				
RI動物実験施設 II期		S55 1980		項目 事業費		改修 104,787			
RI動物実験施設 III期		S60 1985		項目 事業費			改修 97,987		
動物生命科学研究センター		H15 2003		項目 事業費				空調更新 21,000	空調更新 21,000

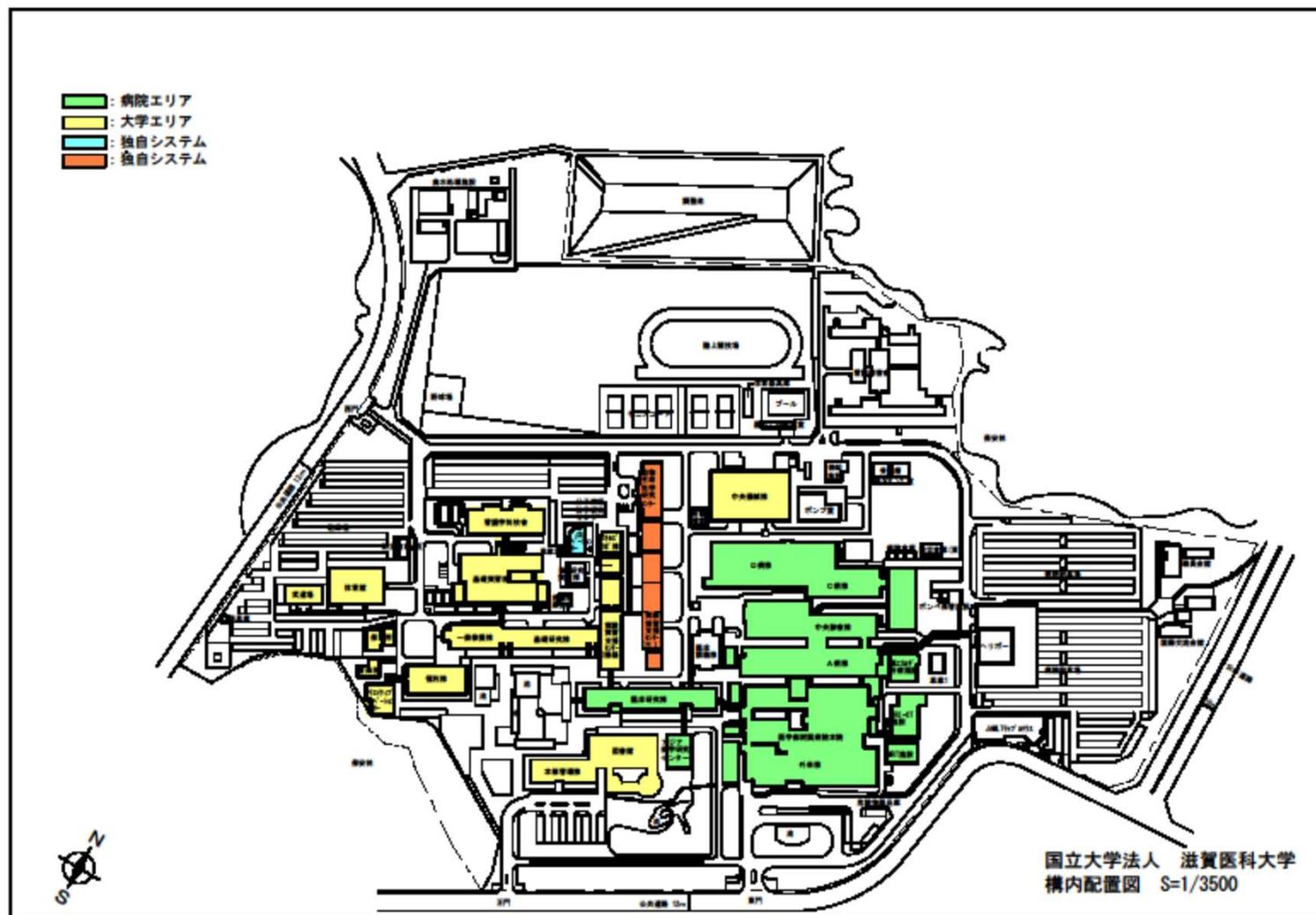
## 5. 部門別計画

### 5-12. セキュリティ計画

本学における第一次セキュリティラインを各建物の外殻に設定する。第一次セキュリティライン出入口にはすべて鍵を設置し、休日夜間は鍵閉鎖または通行者を記録するものとする。

建物内部に必要に応じて第二次セキュリティラインを設定する。その内容は、使用者の事情に応じて設定していく。

第一次セキュリティラインには、その用途に応じて4種類のシステムを使用する(下図参照)。なお、Dr.JOYの導入や医療情報システム端末設置場所に関しては、病院扱いのセキュリティー対策が必要となるため、大学部分でも一部病院システムを採用している。



## 5. 部門別計画

### 5-13. 防災計画

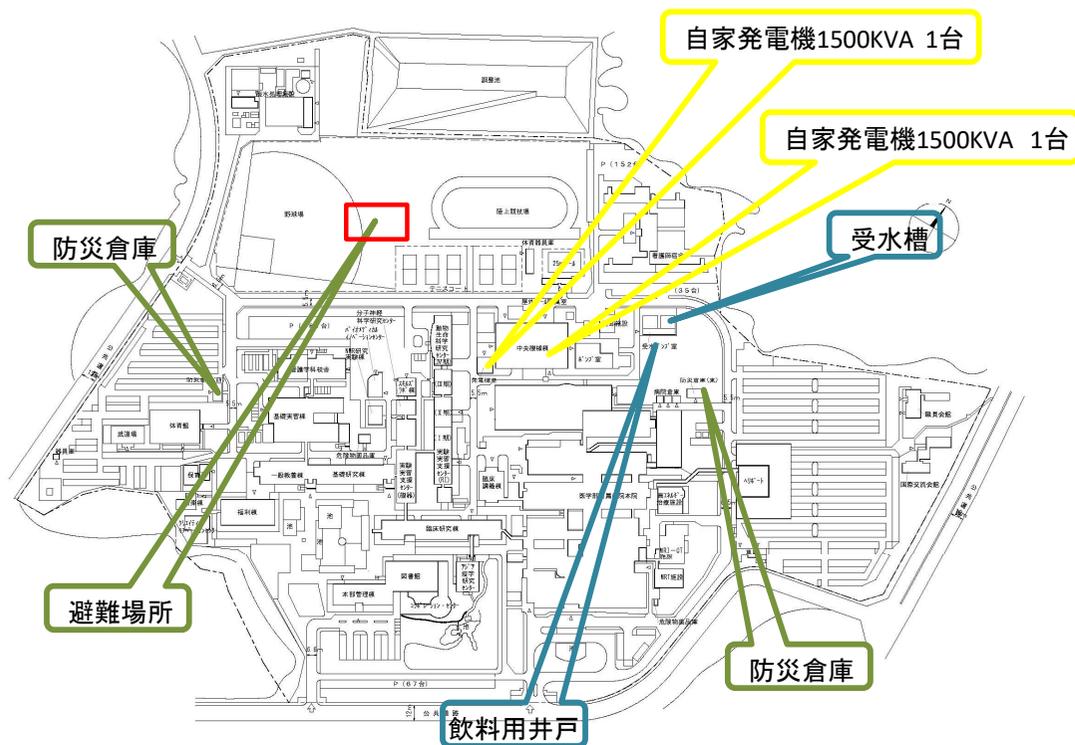
#### ■ 基本的考え方

滋賀県防災情報マップによると、本学に最も被害を及ぼすと予想されるのは琵琶湖西岸断層帯を震源とする地震で、本学での予想震度は6強である。この規模の地震に対して人命を失うことのない施設の整備を目指す。

建物の耐震化は完了している。また、災害時の避難場所となる体育館は、照明器具やバスケットゴール等の非構造部材の改修を行い、天井高さ6m以上で大空間の臨床講義棟2階の講義室3では天井の耐震化を行った。

電力需用のおよそ60%の能力をもつ自家発電機1500KVA×2台を整備している。燃料は約3日分を常に備蓄している。

水需要のおよそ1.5日分の容量をもつ受水槽を設置している。また、大学構内に飲料用の井戸を設置しているので、災害時には自前での水供給も可能である。



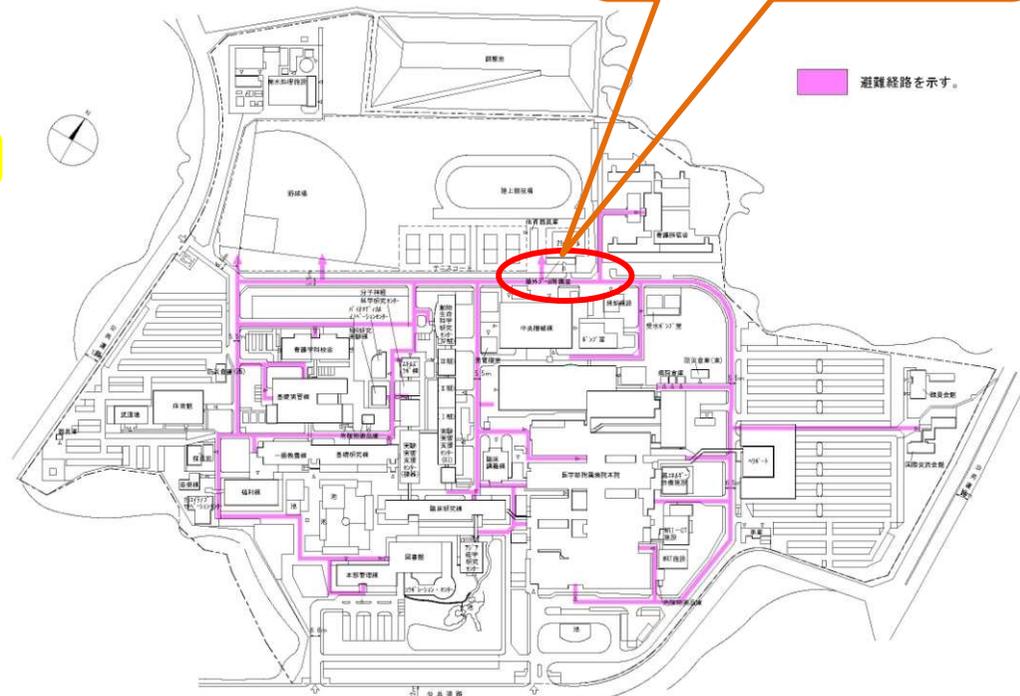
#### ■ 課題

防災施設の主要な部分の整備は完了している。しかし、大学や病院からグラウンドへの避難経路となる歩道は幅が狭く、また、歩車道が分離していない箇所もあるなど、避難に障害となるであろう部分は残っている。

#### ■ 今後の方向性

災害時の避難経路はバリアフリー化を進めていく。特に歩行の困難な患者さんや高齢者の方々の避難が見込まれる病院側の避難経路の整備を優先して進める。

歩道未整備及び車道と歩道との間に2cm以上の段差有り。  
円滑な避難のため、段差解消等避難経路の改修が必要。



## 5. 部門別計画

### 5-14. イノベーションコモンズ化計画

#### ■「イノベーション・コモンズ(共創拠点)」とは

- ・あらゆる分野、あらゆる場面で、あらゆるプレイヤーが共に創造活動を展開する「共創」の拠点
  - ・教育研究施設の個別の空間だけでなく、食堂や寮、屋外空間等も含めキャンパス全体が有機的に連携した「共創」の拠点
  - ・対面とオンラインのコミュニケーションが融合し、ソフトとハードが一体となって取り込まれる「共創」の拠点
- ⇒多様な学生・研究者や異なる研究分野の「共創」、地域・産業界との「共創」の促進等により、教育・研究の高度化・多様化・国際化、地方創生や新事業・新産業の創出に貢献

#### ■滋賀医科大学でのイノベーションコモンズ化

### キャンパスのイノベーションコモンズ化

～共に創造活動を展開できる「共創」の場。各拠点の連携強化～



【ロードマップ】

	整備建物	整備内容	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027
研究	臨床研究棟	全面改修	■								
	基礎研究棟	全面改修			■	■					
	RI動物実験施設	全面改修				■	■	■	■		
教育	一般教養棟	全面改修		■							
	看護学科棟	改修			■					■	■
医療	医療機能強化棟	新営+改修			■	■	■	■	■	■	
	トリアージスペース	新営			■						
産学連携等	RI動物実験施設	一部改修		■	←(WPI予算)						